

主 題：からだのよみがえり

聖書箇所：コリント人への手紙第一 15章1-11節

恐らく皆さんはあのパウロがギリシャのアテネのアレオパゴスの丘の上で語ったメッセージを覚えておられることと思います。多くのギリシャ人を前にして、「神は、そのような無知の時代を見過ごしておりましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。」とパウロは語りました。

「そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの実証をすべての人にお与えになったのです。」と続けました。必ずさばきが来るという話の後、イエス様の復活というパウロのメッセージを聞いていたギリシャの人々はどんな対応をしたのかと言うと、「死者の復活のことを聞くと、ある者たちはあざ笑い、ほかの者たちは、『このことについては、またいつか聞くことにしよう。』と言った。こうして、パウロは彼らの中から出て行った。」と書いてあります。すべては使徒の働き17：30-33に記されています。

注目いただきたいのは、パウロが主イエス・キリストの復活の話をした時に、人々はそれを聞いて「あざ笑」ったのです。というのはギリシャの人々は魂の不死、魂は死なないと信じていました。でも彼らはからだのよみがえりを否定していたのです。多くのギリシャ人の哲学者たちはからだは監獄のようなところであって、死によってそこから解放されて自由になるのだと教え、みんなそのことを待望していたのです。早く死を迎えたい、そうすれば自由になると。ですからからだのよみがえりということになると、また監獄に捕らえられると考えて、彼らはからだのよみがえりを歓迎しなかったのです。コリント教会はこのギリシャ人たちが集まっていた。パウロはこういう人々にメッセージをしたのです。パウロが教えようとするのは、からだのよみがえりについてです。そしてこのよみがえりというのは、私たちにとって大変重要なものです。我々の信仰の呼び方を考えるとしたら、私たちが信じている信仰というのは「よみがえりの信仰」と言えません？我々は死んでも生きるという希望を持って生きています。パウロもそうやって生きていたのです。信仰者パウロにとって、このよみがえりというのは大変重要な真理でした。

もしギリシャ人が信じていたように、からだのよみがえりが無いとするならば、人が死んでそれで終わってしまうのだとすれば、罪からの救いが必要ですか？すべての罪人に救いが必要なのは、人は例外なく肉体的死を迎えた後、最後によみがえり、犯したすべての罪のさばきを受けることが定まっているからです。すべての人間が最後によみがえり、神の前で審判を受けるのです。だからパウロはこのよみがえりという、とても大切な真理を教えたのです。そしてパウロは主イエス・キリストの復活が事実なのだとして教えた上で、このコリント15章で大切な復活について教えています。彼のメッセージをきょうも一緒に見ていきたいと思います。

A. パウロの福音宣教 1-8節

1. 福音 1-3a節

まず1節からご覧ください。「兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私があなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のことばをしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。」(1-3a節)とあります。パウロのことばを借りるならば、最も大切なこととして彼自身が伝えたメッセージは福音のメッセージでした。福音というと罪人を罪から完全に救うメッセージです。罪人に永遠のいのちを与えるメッセージのことです。もう一度1-2節を見てください。「あなたがたに福音を知らせましょう。」そしてその福音とはどういうものなのかをパウロは説明します。パウロは「福音を知らせ」と言いました。初めて彼らが福音を聞くということではありません。もう既に彼らは福音を聞いて信じていたのです。それがその後に出てきます。では何をしているかということ、いま一度神様の大切な真理を彼らに思い起こさせるのです。

1) 「あなたがたが受け入れ」

その福音のメッセージを、一つ目「あなたがたが受け入れ」と書いてあります。この「受け入れ」というのは、彼らが福音のメッセージを受けたり、またそれを得たりすることです。つまり福音のメッセージを彼らが受け取った、彼らがそのメッセージを聞いたという話です。先ほどもお話ししたように、既に彼らはそのメッセージを聞いていたとパウロは最初に言うのです。実は彼らが十分知っていたメッセージです。

2) 「それによって立っている福音です」

そして「また、それによって立っている福音です。」と続きます。このパウロから聞いた福音のメッセージをコリント教会のクリスチャンたちは心から信じたのです。そして彼らはその福音という神の真理に立っていたという話です。この福音の真理に、彼らは信仰の土台を据えていたという話です。この「立っている」ということばが完了形で使われています。つまり過去に立てるという行為を行い、その結果が今現在も継続しているということです。コリント教会の人々の信仰を見る時に、まさにそこに私たちの信仰を見るのです。皆さん注意していただかなければいけないのは、ある人々は信仰を自分の感情に立てているのです。そういう人というのは、救われていると感じる時もあるし、そうでなく救われていないと感じることもある。そういう人の信仰生活はもう波形のように上がったたり下がったりします。大切なことは神が言われたこと、真理にしっかりと土台を据えるということです。

あなたはなぜ救われていると確信を持って言えるのですか、こんな質問を誰かがあなたにしたとしたら、あなたの答えはこうであるはずでありません。それは神がそう言われたからです。神がそのように教えてくださった、神のみことばの真理に立っていますと。私たちは過去においてこういう行為をしたとか、こういうところで手を挙げたとか、こういうところでサインしたとか、それは確かにあなたを導く一つの方法だったかもしれない。しかし、あなたの信仰はそういう行為や感情ではなくて、これが神の言われたことであり、私はこの神様の真理の約束を信じている、私たちの信仰は神が言われたその約束に立つのです。パウロはそのことを指摘するのです。

3) 「この福音によって救われるのです」

そして三つ目に「この福音によって救われるのです。」と続きます。これは受け身が使われています。なぜかという、あなたが努力をして救いを得るのではなく、神から与えられるものだからです。2節を見ると、「もし」ということばで始まる条件節が二つ並んでいます。もしあなたがこのようにしたのだったら、あなたは救われているのですとパウロは教えます。一つ目は「もし……よく考えもしないで信じたのでないなら」と続きます。福音のメッセージをよく考えないで、何となく雰囲気でもって信じたとしてもあなたが思っているのだとしたら、ひょっとしたらその信仰はあなたに本当の救いをもたらしていない可能性があります。何かそういう歌を聞きながら何となくそういう気持ちになって応答したと。パウロは「もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら」、つまりもしあなたがよく考えて信じたのであるならばと言っています。福音のメッセージがどういうメッセージなのか、あなたがそのことをよく聞き、そしてそのことがわかった上で信じたのでないならと。

二つ目の条件はもし「私の宣べ伝えたこの福音のことばをしっかりと保っていれば」、もしあなたが私の伝えた福音のことばをしっかりと保っているのであればと言っているのです。パウロはこの福音のことばを保ち続けることが救われる条件だと言っているわけではありません。例えばイエス様を信じると言っている人がその信仰をずっと保ち続けている、その行為によって救われるという話ではないのです。パウロが言っているのは、本当に救われている人々は、この真理から離れることはないという話です。この福音のことばを保ち続ける——この福音を信じ続けているというのが、その人が救われていることの条件だとパウロは言うのです。だから救われていない人々は、ある一定の期間は福音のうちにとどまり続けているかもしれない。でもいつかその福音から離れていくのです。それがその人が本当に救われていなかったことを明らかにするのです。実はパウロは既にこのことをIコリント11:2でも教えていました。そこには「さて、あなたがたは、何かにつけて私を覚え、また、私があなたがたに伝えたものを、伝えられたとおりに堅く守っている、私はあなたがたをほめたいと思います。」とあります。「私があなたがたに伝えたもの」、パウロの教えです。彼らはそれを聞いて伝えられた主の教えどおりにそれを信じ、それを堅く守り続けていると言っているのです。「堅く守っている」という動詞は現在形です。彼らがそれを堅く守り続けている、彼らがそれを保持し続けていると。みことばが言っているのは、聞いたメッセージを感情ではなくて、そのメッセージがどういうメッセージなのかをしっかりと考えて信じた、それが条件なのです。何もわからず何となく信じた、それが本当の救いをもたらすかどうかです。

二つ目に彼が言ったことは、本当にこの救いにあずかったならば、この真理から離れることはない、それがその人が救いにあずかっていることの証拠なのだ。この真理を次のように考えたらわかりやすいと思います。先ほども見てきたように、救いというのは神からのギフト、神が下さるものなのです。ですから神がその人に救いを与えてくださったら、当然神がその人のうちに変化をもたらすのです。我々が神様にしっかりとしがみついているのではない。神が我々をとらえてくださっているから、決してこの救いから離れることはないのです。ひょっとしたら、ある人々は一生懸命自分の努力で神様にしがみついていたのかもしれない。残念ながらそれは神が教えてくださる救いではないということです。

テキストに戻って、3節「私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、

次のことです。」とあります。パウロは「最も大切なこととして」あなたたちに伝えたと言っています。この福音こそが罪人に救いをもたらすメッセージだからです。この福音こそが神が私たちに与えてくださった救いの唯一の道だということです。「私も受けたことであって」と、パウロ自身も信じていた。

2. 内容 3b-8節

その話をした上で、3b-8節までパウロは福音のメッセージとはどんなメッセージなのか、内容について説明していることを我々は見ることが出来ます。3b-4節「キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたこと、」、お分かりのようにこの福音のメッセージというのはイエス・キリストの十字架と復活のメッセージだということです。

1) 主イエスの十字架について Iペテロ2:22-24、Iヨハネ4:9-10

まず十字架について3節が「聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと」と教えていました。この「死なれた」という動詞を見ると、これは不定過去です。歴史上の事実であることを改めてパウロは言うのです。誰かの作り話ではない。イエス・キリストは確かに十字架で死なれたのです。そして「私たちの罪のために」と、その目的が書かれています。イエス様はあなたの身代わりとして十字架で死んでくださった。もう言うまでもありませんが、それが聖書の教えです。「キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。」、イエスは人の罪に対して罪で応じたのではない。彼はすべてにおいて神の前に正しくあられた。「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。」、あのイエス・キリストの十字架というのは私たちの身代わりだったとペテロもこうして私たちに教えます。3年しばらくの間寝食をともにしたペテロ自身が言うのです。彼自身は我々と同じように罪人ですから、いろいろな失敗を犯しました。でも主イエス・キリストご自身はそうではなかった。すべてにおいて完全であられた。そしてその方が自分の意思に反して無理やりに十字架につけられたのではなく、無実でありながら自分から進んで十字架に架かっていかれた。そしてあなたや私の身代わりとなって死んでくださったと。

このIペテロ2:24で、その後「それは」という接続詞が続いています。イエス様が「自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは」、目的、その理由です。「私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」とあります。ペテロのすばらしいメッセージです。主イエス・キリストの身代わりの死によって、それを信じる私たちに罪の赦しを与えられた。そしてそれだけではなく、救いというのは「義のために生きる」者へと生まれ変わるといことだとみことばは教えています。イエス・キリストの救いというのはあなたを永遠の地獄から救い出す、もし皆さんがそれだけしか聞いておられないとしたら、このペテロのみことばをどんなふうに理解します？救いというのは確かに永遠のさばきから私たちを救ってくださる。でも同時に新しい生き方が生まれるのです。これまでは永遠の地獄にふさわしい生き方をしていたのです。神のみこころに全く背いて逆らって生きてきた。その結果は永遠の地獄です。でもその永遠の滅びに向かっていた私たちが生まれ変わることによって、今度は私たちを救ってくださった、私たちの神の栄光のために生きる者と変わります。これが悔い改めなのです。これが新しく生まれ変わった人の話です。人は新しく生まれ変わらなければ、「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた」(IIコリント5:17)と。神の栄光のために、神の義のために生きる者へと造り変えられたのです。すべては神様の一方的な愛によって、このすばらしいみわざがなされたのです。ですからパウロが改めて教えるのです。彼らによく福音を語ったゆえに、彼らはよく知っていたでしょう。パウロは1年半この町に滞在したのです。人々はパウロからこの福音のメッセージを何度も繰り返し聞いたでしょう。そしていま一度彼は思い起こさせるのです。主イエス・キリストは私たちの罪のために、あなたの罪のために身代わりとなって死んでくださったと。

パウロはおもしろいことばをつけています。3節「聖書の示すとおりに」とあります。つまりパウロは、このイエス・キリストの十字架の死というのは、その時イエス様が思いつきでなされたことではなくて、旧約聖書の中に預言されていたものだと言うのです。当時は、旧約聖書しか存在していません。恐らく皆さんがイエス様の十字架を預言した旧約聖書の箇所として最初に浮かんでくるのは間違いなくイザヤ書53章だろうと思います。2-6節「彼は主の前に若枝のように芽生え、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちが彼を尊ばなかった。まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされ

た。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」と。みことばは確かに神が約束してくださった救世主というのはご自身のいのちをもって私たちに一番必要な罪の赦しを備えてくださる方であると教えています。そしてイエス様の十字架を見た時に、確かにこの方こそが、聖書が教えていた約束の救世主なのだと確信することができるのです。

2) 「よみがえり・復活」について記している 4節

(1) 預言の成就

4節になると、よみがえりの話に移っていきます。「また、葬られたこと」と、「三日目によみがえり」ということが続いています。「葬られた」という動詞も不定過去が使われています。過去における歴史的な事実の話です。この当時、イエス様の十字架だけでなくイエス様が葬られたことを実際に見ていた人がまだ多く存在していたのです。誰もこの出来事を否定することができない。なぜならイエス様は十字架に架かり、確かに墓に葬られたからです。そしてその後「三日目によみがえられた」と書かれています。非常に興味深いのは、ここだけ不定過去を使わず完了形を使っています。つまりイエス様がよみがえって今も生きておられることをパウロは伝えるのです。それが私たちの主であること。

この復活についてもパウロは「聖書に従って」と言います。先ほど3節で見た「聖書の示すとおり」と同じことを言っているのです。つまりパウロは、この復活も実は旧約聖書に預言されていたことであったと言っているのです。先ほどイザヤ書53章を見てきましたけれども、イエス様の復活を示唆する旧約の教えの一つにヨナの話があります。マタイ12:40に「ヨナは三日三晩大魚の腹の中にいましたが、同様に、人の子も三日三晩、地の中にいるからです。」とあります。ちょうどヨナが三日三晩大魚の中にいて、その魚が彼を吐き出してその腹の中から出てきたように、主イエス・キリストも三日三晩地の中にいてその地からよみがえってこられると。実は先ほど触れたイザヤ53章の中にもこの復活の話が出てきています。53:10以降を見ると、「しかし、彼を砕いて、痛めることは主のみこころであった。もし彼（この救世主）が、自分のいのちを（人々の）罪過のためのいけにえとするなら、彼は未長く、子孫を見ることができ、主のみこころは彼によって成し遂げられる。」とあります。なぜ死んだ人を見ることが出来ます？確かにこの救世主はご自分のいのちを人々の罪過の罪のためのいけにえとして捧げて死を迎えるのですが、それで終わってないからです。この備えられた救いによって救いにあずかる者たちが出てくることを見るからだ。

ですからパウロが伝えたいことは、なりゆき上イエス様が十字架に架かったのでもないし、何となくイエス様がその死からよみがえってきたのではない。これはすべて聖書が預言していたとおりだと。だからこのことを通して私たちがはっきり知ること、パウロがコリントの人たちに伝えたかったことは何かというと、この主こそが約束の救世主だ、唯一の救い主だということです。

(2) 復活の事実 5-8節

そしてその後で復活の事実について教えていきます。5-7節「また、ケパに現われ、それから十二弟子に現われたことです。その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現われました。その中の大多数の者は今なお生き残っていますが、すでに眠った者もいくらかいます。その後、キリストはヤコブに現われ、それから使徒たち全部に現われました。」と。パウロはイエス・キリストが復活されて誰にご自身を明らかにされたのか、わざわざそのリストを挙げてくれています。「ケパ」——ペテロに現れてくださった。次に「十二弟子に現われた」とありますが、これは「十二弟子」全員に現れたということではありません。なぜならばイエス様が「十二弟子に現われた」時に、当然ユダはいませんし、トマスもいませんでした。でもイエス様が「十二弟子」のメンバーに現れたという話です。そして「五百人以上の兄弟たち」の前に現れ、そして主イエス・キリストの異父兄弟「ヤコブに現われ」た。このヤコブはヨセフとマリヤから生まれ、イエス様はマリヤと聖霊によって身ごもり生まれてきたのです。ですからイエス様の父親の違う兄弟です。このヤコブはイエス様が復活された後にイエス・キリストを信じています。ヨハネ7:5や使徒1:14で彼のことが記されています。そしてその後「使徒たち全部に現われ」とあります。最後に使徒たちすべてに主は現れてくださったと。この出来事があって、イエス様は昇天なさっていくのです。天に凱旋なさったのです。

そして、8節「最後に、月足らずで生まれた者と同様な私にも、現われてくださいました。」、パウロに対してイエス様がご自身を明らかに示されたのはイエス様が天に凱旋した後のことでした。「月足らずで生まれた」という表現がありますが、シンプルに言えば、これは未熟児の話です。赤子というのは自分で生きることはできませんが、生きる希望も全くないような存在だということです。なぜ自分をこんなふうと呼んでいるか、その理由が9節に「私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。」と書いてあります。なぜこんな表現をパウロが自分自身に使っているかというと、パウロは「教会を迫害」する者だったからと。パウロがイエス様にお

会いたのはダマスコに向かう途中でした。パウロは何のためにダマスコに行こうとしたのかというと、より多くのクリスチャンたちを捕らえて迫害するためです。でもそこでパウロは復活された主にお会いするのは、この時までパウロは救いをいただくことを拒否していた不信者だったのです。なぜなら彼はユダヤ教に通じていたのです。最高の学問を受けたのです。旧約聖書に関してはエキスパート、専門家だったのです。でも悲しいことに救いを受けていなかった。知識は持っているけれども、救いをいただいていない、そういう人たちはどの時代にも、どこの国にも存在します。パウロはその中の一人だったのです。

パウロがこのように8節で表現したのは、彼は自分がどんな存在なのかによく気づいていたからです。日本人的な考えで謙虚な心を持って、心でそんなこと思っていないけど、そう言った方がいいみたいな自分自身のことを卑下したわけではありません。そうではなくてパウロは本当に自分は未熟児で自分の力で生きることのできないほどどうしようもなく弱い存在だということに気づいていたのです。こういうパウロの表現を思い出しません？「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。』…私はその罪人のかしらです。」と、Iテモテ1：15でパウロはそう言いました。コリントでは私は「月足らずで生まれた者と同様」な者だと。このような自己評価をパウロがしたのは人と自分を比較していなかったからです。もしそれをしていたら、私は確かに罪もあるし、厄介な存在かもしれないけれども、あの人たちに比べてマシだとか、イスカリオテのユダに比べたら、私は絶対マシですよと言えたかもしれない。でも彼は人との比較をしていないのです。

何をしたかということ、神の目に映る自分の姿をそのまま彼自身は受け入れ、これが私なんだと告白するのは。神様の観点から、神の目を通して彼は自分を見るのです。そしてそこに映るのは本当の自分の姿でした。完全な聖さと義を命じておられる最も聖い神に対して逆らい続けている、罪に汚れ切った本当の自分を見るのです。私の心のすべて、私の思いのすべてを知っておられる神が私をどうご覧になっておられるのか、どんな存在として神の目に自分が映っているのか——。恐らく多くの皆さんがパウロが私は「罪人のかしら」だと言った時に、パウロ、あなたは間違っている、あなたよりも罪深い存在がここにいます。それは本当の自分の姿を知ることによって、私たちが告白する真実の自己評価です。パウロがした自分の評価を見る時に、間違いなく聖霊なる神様がそのみわざをなしておられたのです。私たちが救いにあずかる時に、すべての人たちが共通して経験することは、神の前で私がどれほど罪深い存在であるかを知らされることです。僕らの頭には限界があって、神様のメッセージを幾ら聞いても悟り切ることができない。でもある時に聖霊が私たちのうちに働いてくださって、そういう意味なのか！と神が悟りを与えてくださる。同時に神は私たち自身がどれほどこの神の救いに値しない存在なのかを悟らせてくださる。神様、私こそが地獄に一番ふさわしい存在だと。それが聖霊なる神様の働きなのです。ちょうどパウロがこのような自己評価をした時、少なくとも彼の心の中に聖霊なる神様が働いてくださった。私は救いにあずかる資格のない者だと。

しかし、そんなパウロが救われ、10節「ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。」とあります。パウロは自分の罪深さに気づいて私はどうしようもない罪人で救われる価値のない者です、そこで終わっているのではなくて、そんなどうしようもない者を神は愛して救ってくださった。だから彼は神を感謝しながら生きるのです。多くのクリスチャンたちが自分の罪深さに気づいて、神様、私を赦してください、神の前に赦しを求められるけれども、また罪を犯す。それを繰り返しているうちに、自分はもうどうしようもない、情けない信仰者だと思い始めると、その人のうちから感謝がなくなるでしょう？皆さん、陥ってはならない罪は、自分の罪深さに気づいた時に、こんな私が本当に救われているのだろうかとか、こんな私のような者を神様は使ってくださいのだろうかとか、そうやって自分をどんどん追い詰めていくことです。言い方をかえれば、そんな罪深い自分をみずからが苦しめることによって、罪の償いをしているかのように、そういうことを神様が私たちに望んでおられて喜ばれるかのように思って生きている信仰者がいるのです。どうしようもない、こんな自分をもっと苦しんで、もっと懲らしめを受けて生きるべきなのだ。非常に人間的な生き方です。

例えばもしあなたが私は「罪人のかしら」ですと告白したとしても、すばらしい知らせがあります。その知らせは、あなたはまだ自分のことをわかっていないのです。「罪人のかしら」だと言うけれども、あなたが思っているよりもあなたは罪深いのです。あなたが思っているよりも、どうしようもない存在なのです。でも私たちがそこで止まるのではなくて、そんな自分を責めることによって、「神様、私はこんなふうに自分を苦しめています、追い詰めています。これでいいですか？神様。」ではなくて、こんなどうしようもない者が救われたことに私たちは感謝するのです。パウロもどうしようもない罪人だと、「月足らずで生まれた者」だと、「罪人のかしら」なのだ。しかし、神の恵みによって私は今の私になりました。こんなどうしようもない者を神様は救ってくださったのだ、それが彼自身だったのです。だから感謝するのです。信仰者の皆さん、きょう礼拝を捧げるために集まって来られた。でもあなたは

神が赦してくださったことに対して、救いを下さったことに対して感謝を持って集まって来られましたか？間違いなくパウロは自分のことを責めながら、自分を卑下しながら歩んでいたのではないのです。自分の罪深さは知っていました。でも、こんな私が救われたのだということを喜びながら彼は生きていた。神の恵みによって私は救われたのだと。

3. 神の恵み 10b節

そしてその後、神の恵みについてパウロは少し説明を加えます。10節「ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。」「神の恵み」、救いの話です。誰でも自分の罪を悔い改めてイエス・キリストを救い主として、自分の主として受け入れるならば、神はその人を新しく生まれ変わらせてくださる。なぜならば私たちの神にはどんな罪人でも赦す力があるからです。どんな罪でも完全に洗い清めてくださる、その御力があるからです。パウロは救いにあずかった。その後「そして」ということばが続いています。「私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」と。救いをもたらしたこの「神の恵み」について説明を加えているのです。

1) 働きを生み出す：

神様の「恵み」というのは、救いだけにとどまるのではないとパウロは言います。「恵み」は働きを生み出していくのです。10節で「私に対するこの神の恵みは、むだにはならず」と書かれています。この「むだ」ということばは「空しい」とか「役に立たない」、「価値がない」、「実を結ばない」、「成功しない」という意味を持っています。この文章を見ると、この「恵み」はむだにはなることはない、つまり否定なのです。むだになりませんよ、空しくない、役に立たないことはない、価値がないことはない、実を結ばないことはない、成功しないことはないという意味です。この「恵み」はむだになることはない。また、この「なる」という動詞も「～とされる」とか「なった」という意味で、これも不定過去、しかも受け身が使われています。

まとめるとこうなります。神様の「恵み」はあなたを完全に罪から救い出してくさる。でもこの「神の恵み」というのは、それで働きを終えたのではなく、あなた自身を実を結ぶ者として完全に生まれ変わらせてくださる。あなたを神の前に役に立つ者として生まれ変わらせてくださる。パウロが言いたいのは、もうそれは既にあなたのうちになされた神のみわざなのだということです。クリスチャンである私たちというのは、神にとって役に立つ者になった者たちなのです。だから受け身だし、もう不定過去なのです。これから努力してそうなると言っているのではない。そういう人としてあなたは生まれ変わったのです。あなたは神のお役に立つ存在なのです。そういう人として生まれ変わったと言うのです。あなたは実を結ぶ存在として生まれ変わったのです。パウロはこれも「神の恵み」なのだと言うのです。だから言い方を借りたら、救いにあずかったあなたは主の栄光をもたらす生き方、主の前に忠実に従順な生活を生み出していくことがもう可能になったと。そしてこのすべてを可能にしてくださったのが「神の恵み」なのだと教えるのです。

私たちは、よく神様の「恵み」というのはあなたを罪から救ってくれる、永遠の地獄から救ってくれる、何かそれだけに限定されているように聞くことがあります。でもみことばはそうは言っていません。先ほど見た1ペテロ2：24に我々は神の「義のために生きる」とありましたが、多くの人はそれは無理だと言う。でもみことばはそれが可能な人へと生まれ変わった、それがクリスチャンだと言います。神がそのみわざをなしてくださったと。ですからまずパウロは神様の「恵み」というのは救いだけではなく、神がお喜びになる、神が求めておられる生き方を生きる人へと生まれ変わらせてくださるのだと教えています。

2) 働きを成し遂げる力：

それだけではないのです。「そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。」と続いています。パウロは、によって私は救われ、生まれ変わった、そしてほかのすべての人たちよりも多く働いたと言っています。彼が彼自身を自慢しているのかということそうではないのです。確かにパウロは熱心に、いのちがけで主に仕えた人物です。ここにある「多く働いた」という「働」くということばは「苦勞」とか「疲れ果てる」ということばです。できることをできる時だけにしたとか、そんな生き方ではなかった。彼は大変苦勞したのです。主に仕えることにおいて疲れ果てているような、疲れ切る限界までそのように歩み続けた、そのように働き続けたのです。パウロは自分にできることだけをしたのではないのです。神が命じることを限界まで、疲れ果てるまでしたのです。これがパウロ自身のクリスチャンとしての人生でした。

パウロは私がしたのではなくて、パウロがどんなふうにいるのかみんな知っていたのです。喜んで犠牲を払いながら、喜んで主のために疲れ切る限界まで歩み続けた。彼が言いたいのは、みんなそのことを知っているでしょう？でもそれは私ではなく、私にある「神の恵み」なのです。このす

すべての働きは神が可能にしてくださったと。パウロは主に忠実であり続けることを願いながら最善を尽くしたのです。彼は主に仕え、みこころを行い続けることに努めたのです。そしてパウロはそのような生き方は、私だけができたのではなくて、実はあなたにもそれができるのだと言うのです。ではその鍵はどこにあるかという、「私ではなく、私にある神の恵みです。」と。つまり彼が言っていることは、私は自分に備えられた自分の力でこの働きをしたのではなく、「恵み」が備えてくださる力によってこの働きをしたと言うのです。

まとめるとこうなります。クリスチャンとして主に忠実に生きていくというのは大変難しいことです。もう我々が経験しています。しかし、聖書は可能だということを教えます。聖書はそれはたやすい、問題のないことだと言っているのではないのです。そこには大変な覚悟が必要だったり、いろいろ涙が流されたりもあるでしょう。でもみことばは、主に忠実に従って生きていくというのは難しいけれども、可能なのだと言うのです。この地上において、罪のない完全な者となることは残念ながらできません。しかし、主に栄光を現す生活、主の命令に従う生活を送ることは可能なのです。それを可能にしてくれるのが「神の恵み」なのだ。ですから「恵み」というのは私たちを罪から救うだけではない。

「恵み」というのは与えられた働きをなす力なのです。パウロは神が彼に召してくださったその働きを忠実に行ったのです。その力がどこから出てきたのか——。「神の恵み」によってです。

我々が何度も学んでいるように、神はあなたにすばらしい賜物を下さったのです。賜物をいただけないクリスチャンはどこにもいません。あなたはそれをういながら教会にあっても、主に栄光を現していくのです。神は賜物を下さった。そしてあなたがそれをういて主の栄光を現すことは可能ですとみことばは教えます。だからあなたに「恵み」が与えられているのです。パウロはそれを知って、その「恵み」を信じて、神に助けを求めながら生きたのです。そして神は用いたのです。なぜなら用いられる人として生まれ変わったからです。あなたはそんなふう生きています？神は私を用いてくださる。そんな者として生まれ変わらせてくださった。下さった賜物を用いて生きていくのだと。だから主よ、私を使ってくださいと。そのことを期待しながら、まず何か始めておられます？それとももう教会に来たから私のお務めはすべて果たしたと、もしそういう選択をしているのだしたら、神はそれしかあなたを通してなさない。神に力がないのではないのです。あなたが神の働きを拒むからです。そんな生き方をあなたがすることを神は望んでおられないことは皆さんおわかりでしょう。ですから11節「そういうわけですから、私にせよ、ほかの人たちにせよ、私たちはこのように宣べ伝えているのであり、あなたがたはこのように信じたのです。」「恵み」がどんなものか、あなたたちは聞き、そしてそれを信じた。永遠の滅びからあなたを救ってくださるし、神様はあなたを使ってください。これが「神の恵み」だということをおあなたも信じて、私も信じた。

彼はこのメッセージを宣べ伝えたのです。すべてのクリスチャンは「神の恵み」により救われ、「神の恵み」によって用いられるのです。コリントの教会だけではなく、我々もそのことを知ることが重要です。もしあなたが自分の不信仰さに愛想をつかし、自分の信仰生活に失望を抱いているならば、実は問題がここにあるのです。あなたの問題は主なる神の力に頼るのではなく、自分の力でもって主に喜ばれる生活を送ろうとしているところにあるのです。あなたにはパウロに与えられたと同じ力が与えられていることを覚えることが必要です。パウロが生きたように、あなたも私も生きることができる、そのことを覚えることです。我々クリスチャンは確かに完全ではありません。でも主に従いたいとか、主のみことばに忠実でありたいという強い願いを間違いなく持っているはず。なぜならこの願いというのは、主がクリスチャンであるあなたに与えてくださったものだからです。そして我々は願っただけでなく、そのように生き続けるために必要な力を神が与えてくださったことをきょうも見てきたのです。このメッセージをパウロは語り、このメッセージを彼自身が信じたのです。神があなたに力を与え続けてくれている。主が望んでおられる生活をあなたが送るために必要な力を神は与えてくださるのです。我々クリスチャンというのは「恵み」によって救われ、「恵み」によって生きる者たちです。これがパウロが神様の「恵み」をたえた理由です。そして同じ「恵み」をいただいている私たちもこの神様の「恵み」を心からたたえながら、主よ、私をあなたのためだけに使ってくださいと、その祈りを持って与えられたこの一日をしっかりと歩んでください。こうやって我々信仰者は生きるのだとパウロが教えてくれます。